

断捨離（だんしやり）

「魔が差す」という言葉がある。悪魔が心に入り込んで一瞬、判断や行動を誤るという意味のようである。あのときの私はまさしく魔がさしたのであった。

十畳の書斎の、天井まで作りつけた本棚が本でぎっしりと埋まり、もうこれ以上の置き場所はなく、真ん中におかれた大きなテーブルの上まで積み重ねるような事態になった。十畳の部屋は物置と化し、収まるべき場所を失った本たちが、床の上にも寝そべっている。足の踏み場もないとはこのことだ。

ドアから部屋をのぞいてはため息をついて掃除をすることも出来ずにひきかえず。こんな状態になると本に対する愛着など、どこかへ消えてしまう。読みもしないのに夫の残した寺田寅彦全集、小林秀雄の全集、渋沢竜彦の選集、モーリヤック、ポー、ガルシアマルケスなどなど。いろんな本がどうでもよくなった。「どうせもう読まないのだから」と自分に言い聞かせた。

学生時代から親しんできた神田の古書店、小宮山書店に電話をする。三島由紀夫の資料があると言ったら二つ返事で二人の店員が軽トラックを運転してやってきた。学

生時代のフランスの小説はもう読み返すこともないだろう。しかし彼らが、「手放したくない本は予め、のぞいておいてください」といったとき、もつと慎重に対処するべきであった。一応、村上春樹と平野啓一郎ははずした。三島由紀夫の自決した当日の各新聞社の切り抜き、週刊誌、初版本、サイン本、ほとんどの作品を網羅している単行本、美装本など、私の心の中で三島由紀夫は過去の作家となったとはいえ、全てを思い切りよく手放すことはなかったのに。

イスラム文化に対して思い込みがあった。キリスト教文化と渾然としているスペインが好きだった。日本で言う隠れキリシタンのように、レコンキスタによって迫害されたイスラム教徒が地下にもぐって活動した歴史はスリル満点である。それらの本に交じっていた稀本をとっておくべきであった。処分するまでは惜しいという気持ちはさらさらなかったのだ。二人の男性が、半日かけて束ねた本をトラックに積んでいくのを眺めていても、これで十畳の部屋が片付くと思えば気分は悪くなかった。

問題はその後である。平凡社の百科事典と三十年代の筑摩書房の世界文学全集、集英社の現代世界美術全集は売り物にならないと引き取ってくれなかったが、後はさばさばしたもので文庫本にいたるまで綺麗に持っていつてくれた。伊藤計劃の「虐殺器

官」も失ってしまった。五木寛之の多くの文庫。空っぽになった書棚は違う部屋かと思ふほどすつきりしてほっとしたのもつかのま、その夜から、六十年かけて私なりにコレクションした本を手放したことがどんなに大変なことかを思い知ることになる。

学生時代からこつこつと集めた本であった。悲しみと激しい後悔はその夜のうちにやってきた。確かにもう読むこともないだろうと思える本も数多くあった。慎重にそれだけを処分するべきだった。しかしその仕分けをすることも億劫なほど本は溢れていたのだ。

本当に気前よく手放してしまった。去っていった本の亡霊にこんなにも苦しむことになるうとは。今や体の一部が切り取られたように痛い。

今度は本のなくなつた書齋を見るのが辛くなつた。——私はなんとという取り返しのつかないことをしたのだらう——失つた本のことが頭から離れなくなり、何をしても鬱々として楽しくない。それがすべて一時的に投げやりな気分になつた自分のせいなのだから誰を非難するわけにも行かない。小宮山書店に電話をしてから取りにくるまでに一週間はあつたのだから、その間に思いとどまればよかつたのだ。持ち去られて、初めて後悔するとはなんとばかりしていることだらう。

二人の娘に愚痴をこぼす。彼女たちは異口同音に「片付いてよかったじゃない。もう読みかえすこともないだろうから整理してくれてありがたいわ」彼女たちはホッとしているようだった。一人で抱え込むのが辛いので、我が家の蔵書を知っている友人知人に切々たる思いを聞いてもらう。元はといえば自分が悪いのだから弁解のしようもないが、あの行為は私の決断などでは決してなく一時的に「魔がさした」としか言いようがない。

優しい友人は「思い切ったことをしたわね」と驚く。自分の持ち物の一番大事なものを処分したのだから、もう後は惜しいものはなにもなく、気持ちも軽くなったでしょう。かえってすっきりしてよかったかもよ、と慰める人が多い。世情は「断捨離」の時代。物を捨てるのにお金がかかる時代、子供の迷惑にならないようにと老人は身辺を整理する時代である。

文学に興味のないわが二人の娘たちも少しでも物がなくなつて安心しているのかもしれない。私も月日が立つたら忘れることが出来るだろうか。読書家の一人の友人は次のように言ってくれた。

「本を買っていつでも読めると思つて安心してると、結局読まずに「積んどく」

ということになる、喪失感で当座は落ち込むが、必ず新しい自分が形成されると思う。
自分とは絶えず変化していくもの、心優しく生きていけばまた脱皮して新しい自分が
うまれると思う」

その言葉にすがって新しい自分に賭けよう。

(二〇一二年十一月)